

古文書倶楽部

【発行】
秋田県公文書館
2010.9
第36号

公文書館閲覧室にて十月上旬より
「公文書館収蔵資料にみる大仙・
仙北・美郷」展示を開始します。

アーカイブズコースへのお問い合わせは、
公文書館までお願いします。
電話 018(866)8301

アーカイブズコース開始!

十月より公文書館講座アーカイブズコース(全四回)が始まります。今回の古文書倶楽部では、第一・二回の講座から内容を少しご紹介いたします。

家督破りは許さない! 村娘のおとり捜査

第1回
10/8(金)

(2010年9月)
米町の米、大町の絹・木綿など、秋田藩では久保田城下の主要な町人町に、城下内での独占販売権を与えていました。この特権は家督と呼ばれます。ところが、家督を持たない他の町々や城下周辺の村々による売買(家督破り)が後を絶たず、家督町の町人は常に家督破りの取り締まりに奮闘します。ここでは、当館が所蔵する「白米家督」(資料番号・米沢八三)という資料をみてみます。

古文書倶楽部第36号
天明六年(一七六八)閏十月十四日、米家督を持つ米沢町・十軒町の町人が、牛嶋村の取締りに向かいます。牛嶋村は久保田城下の入口に位置し、城下に運び込まれる物資をもとに商売する者が多い村でした。両町の町人は、牛嶋村の弥兵衛による米売買を見咎めますが、弥兵衛は悪びれた様子も見せません。

そこで両町同様に米家督を持つ米町の四人が牛嶋村に向かいます。彼らは、「同村作兵衛娘頼、弥兵衛方江白米式升調二遣候」と、村娘をおとりにして弥兵衛宅の米売買の決定的瞬間を押さえようとします。娘を向かわせた後、米町の四人は弥兵衛宅に踏み込みますが、弥兵衛は「拙者方二而娘二白米売不申」と売買を認めず、娘をしっかりとつめます。すると娘は「啼きさわき大き鷹申候」と大パニックとなり、あわてた米町町人により、娘の親戚だという隣家に預けられます。

おとりの村娘に売り渡された白米二升は、弥兵衛の米売買の証拠として米町町人に差し押さえられます。また「町触控」という資料からは、閏十月二十一日に、牛嶋村を含む城下近郊の八ヶ村に対して米売買などを禁ずる命令が出たことがわかります。

時には村娘を巻き込んだ家督破りの取締りですが、必死の取組みにも関わらず、周辺村による家督破りはこの年も止むことはなく、家督町の悩みは続くこととなります。

十月八日のアーカイブズコースの第一回は「米沢町記録」という資料群をもとに、米家督をめぐる奮闘を含む町人の実態を探っていきます。
【加藤 昌宏】

秋田県の旧制女学校

第2回
10/22(金)

現在、秋田県内の県立女子高校は共学化、もしくは統合の対象となっており、県内において近い将来「女子高」として存続するのは私立高校のみとなります。



昭和5年女子技芸学校薙刀体操

秋田県内における「女子高」は、そのほとんどが戦前の実科高等学校、高等女学校など「女学校」からの系譜を引いており、当館には学校の設置、教育内容や高等女学校への昇格など、公立・私立の女学校に関する資料が保存されております。

十月二十二日の講座では戦前の女学校についての資料をご紹介しますとともに、戦前から続いた女子教育の果たしてきた意味などについて考えたいと思います。
【煙山 英俊】

古文書こぼればなし

城下町秋田の原風景（久保田城下 三の曲輪のことども）

重陽の節句が過ぎたというのに、秋の風情には程遠い晩夏。暑さにまぎれての素材は、古文書ならぬ古絵図とさせて頂きます。

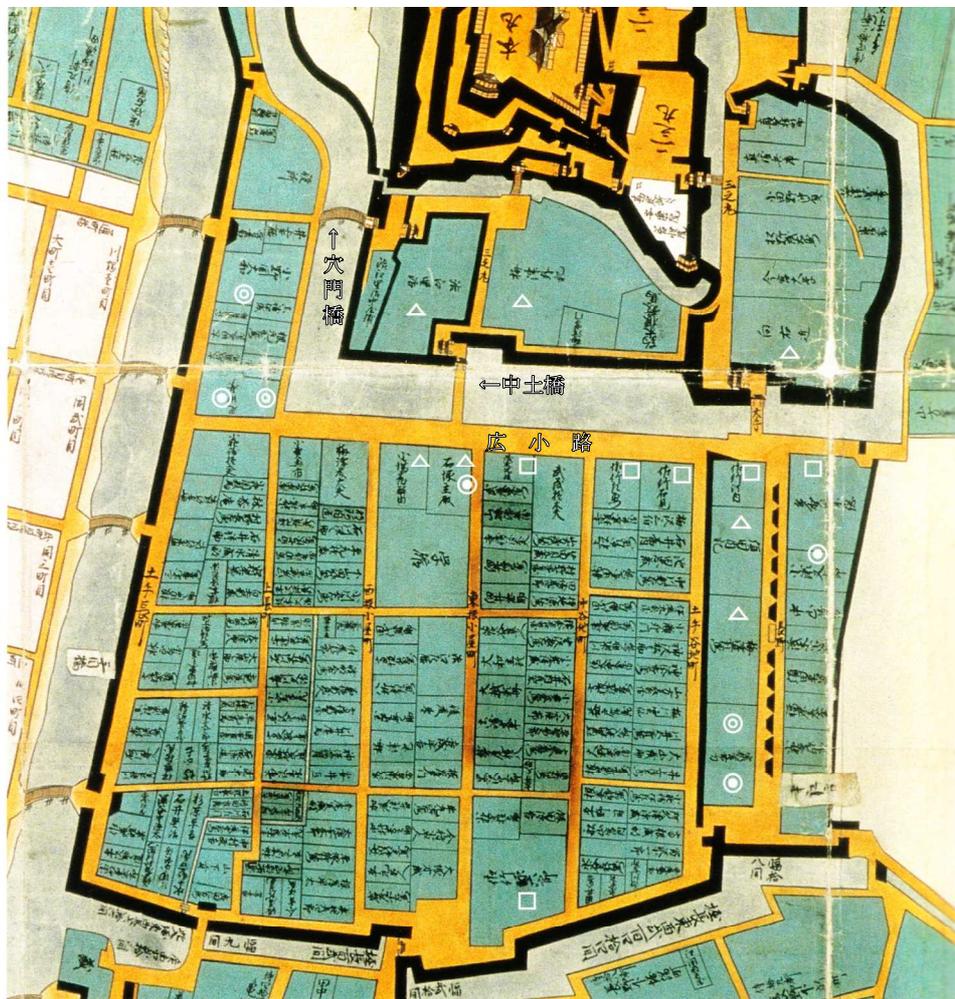
その狙いは、当公文書館にある城下絵図で往事の城下町秋田（久保田）の内町三の曲輪を垣間見て、現在の広小路・中通り界隈の江戸時代の様子を彷彿させ、現況と対比してみることにあります。

久保田城は東方は湖沼群、西方は仁別川等、湖沼や河川に恵まれこれを防御面で活用できる場所である窪田神明山を中心に慶長八年（一六〇三）構築が始まり、寛永八年（一六三二）頃完成したもので、寛文初年頃（一六六一）の久保田城御城下絵図（県C-168）では、城下は仁別川を改修して外堀と成し、内町武家町・外町（町人町）を区別したほか、城郭の回りは二重の水堀で囲まれた堅牢なものであったことが瞭然です。

古文書倶楽部 第36号 (2010年9月)
家臣の配置は、城郭内並びに近いところから引渡・廻座等上級家臣から中・小家臣の順に配置され、広小路に面した三の曲輪には上級家臣屋敷が建ち並んでおりました。広小路界隈の原風景を文化十一年（一八一四）を例に取り「御国目付下向之節指出候御城下絵図」（県C-179）によって俯瞰しますと、まず

大手（元ホテルハワイ付近）正面に展開する土手谷地町には須田（廻座・御相手番）、梅津（廻座・御相手番）、宇都宮帯刀（引渡・家老）の三家が並んで前面を固め、広小路（久保田城下では城に平行して走る道路を小路、城に向かって走る道を通りと呼んでいました）には東から多賀谷（引渡・檜山所預）、佐竹河内（北家・引渡・角館所預）、佐竹岩見（西家・引渡・大館所預）、佐竹左衛門（南家・引渡・湯沢所預）

の久保田屋敷が並び建ち、広小路と城中を結ぶ中土橋の対面からは茂木筑後（引渡・十二所所預）の久保田屋敷をはじめ、石塚・小場（御相手番）と続き中土橋内部に屋敷を構える藩政開始以来の功臣梅津・渋江両家と堀の両面から中土橋を警護しています。また、九代藩主佐竹義和を家老として補佐し藩政改革に功あつた正田斎・小野岡大和家も広小路角、穴門付近の要地に配置されていました。そして三の曲輪の東根



家老 御相手番 一門及び主な所預（文政4年頃の家老）

註 原図は「御国目付下向文節指出候御城下絵図」（県C-179）である。

小屋町にあつたのが黒沢家（大御番頭）で、屋敷は建物ともども昭和六〇年代まで現地に残っていましたが、現在は一つ森公園に移築され国の重要文化財に指定されています。黒沢家こそが城下町久保田の原風景を偲ばせる唯一の現存する武家屋敷です。秋風に誘われて古絵図と照らし合わせながらの散策も一興かと存じます。

【渡部 紘一】